



TITLE:

[書評] 李厚基・韓海明「人鬼狐妖  
的藝術世界:<聊齋志異>散論(附選  
注百篇)」

AUTHOR(S):

岡本, 不二明

---

CITATION:

岡本, 不二明. [書評] 李厚基・韓海明「人鬼狐妖的藝術世界:<聊齋志異>散論(附選注百篇)」. 中國文學報 1983, 35: 112-121

ISSUE DATE:

1983-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177398>

RIGHT:

授退休記念中國文學・語學論集」がある。

本書の據ったテキストは世綵堂本（中華書局排印本『柳河東集』一九七四年版）であり、校勘もただ世綵堂本の來注のみに據っているだけである。他の版本とも校勘し、引用に際して問題のある箇所にはその決定理由を示して欲しかった。一例を挙げれば「生人を以て主と爲し、堯舜を以て的と爲す」が大中の道の内容のひとつであるとして隨所で引かれている（一〇八、一〇九、一四四、一五三頁等）。然し新刊増廣百家詳補註本や蔣之翹輯注本などは「聖人を以て主と爲し」とある。因みに前者の版本を校點した『柳宗元集』（一九七九年中華書局）の校勘記は「上下の文意を案ずるに、此處『聖人』と作る、是に近し。」と言う。これなどは柳の中心的思想にかかわる箇所であるだけに多くの版本と校勘した上で何らかの理由を示して欲しかった。

最後に、本書の特徴のひとつに日本に於ける柳研究の紹介がある。卷末に中國の論文のみならず、「當代日本研究柳宗元文獻目錄」が附録され、しかも論文の題目を漢譯して讀者の便宜をはかっている。また卷頭には清水茂教授の

紹介によって知られた宋刊三十卷本『唐柳先生文集』及び『新刊五百家注音辯唐柳先生文集』の影印四葉を附している。氏はそれらの利用を説くとともに（三〇九頁）、既に自ら研究を進めておられる（三〇七頁）。氏の日本人研究の紹介は本書ばかりではなく、他に「當代日本研究中國古典文學管窺」（『社會科學戰線』一九八〇年第四期）「日本學者研究六朝文學的新收穫」（『學林漫錄』第八輯）などがあることもつけ加えておこう。

以上、專家積年の大著をもてあまし、紹介もそこそこに局部的な反論に急いだ書評になってしまった。盲者蛇に怖じず、青盲の妄言、お宥しいいただきたい。

（京都大學 戸崎哲彦）

李厚基・韓海明『人鬼狐妖的藝術世界——

《聊齋志異》散論（附選注百篇）』

天津人民出版社 一九八二年三月 六六二頁

久しぶりに『聊齋志異』に關する刺激的な論文集が上梓

されたことを喜びたいと思う。

本書は前半に李厚基氏の手になる十二篇の論文を収め、後半に檢索の便を計り夫人の韓氏による『志異』百篇の選注を附す。

所收の論文は次の通り。論文番號は評者が便宜上つけた。

(1) 地坼天崩 矛盾重重——《聊齋志異》作者蒲松齡生活的時代和社會環境

(2) “一生遭盡擲揄笑、伸手還生五色烟”——蒲松齡的生平與著作

(3) 全牛未睹 半豹得窺——略談蒲松齡思想的重要一面

(4) “邱壑曠乎襟懷 文章假之天地”——蒲松齡藝術觀摺瑣

(5) “漱滌萬物、牢籠百態”——《聊齋志異》的創作和生活關係

(6) “刻鏤物情、曲盡世態、冥會幽深、思入風雲”——從《聊齋志異》對生活的描寫和評述談它的形象與思想的關係

(7) “用傳奇法、而以志怪”——中國文言短篇小說的發展

書評

和《聊齋志異》的繼承創新

(8) 瑕瑜互見、媿妍并存——略談《聊齋志異》的思想內容  
(9) “太池未央、萬戶千門、武陵桃源、自關村落”——散議《聊齋志異》中矛盾衝突的藝術構成

(10) 層見疊出 變化不窮——《聊齋志異》刻劃人物性格的幾點特色

(11) 剪裁入妙 結撰維新——《聊齋志異》的結構特徵

(12) 字字珠璣 聲聲鏗鏘——《聊齋志異》的語言美

以上に示した副題からも分る通り『志異』及び蒲松齡について極めて多面的な論及がなされている。

後記によれば、論文は大部分國內の雜誌に獨立して發表したもののゆえ若干の重複を免れないが、收録の際にいくらか加筆削除したと言う。初出は不明であるが、左記のものみ追跡できた。

論文(2) 天津師院學報一九七九年一二期

論文(6) 光明日報一九七八年五月二十七日

論文(7) 天津師院學報一九七八年一期

論文(9) 蒲松齡研究集刊二輯一九八〇年

論文(10) 文史哲一九八〇年六期

論文(12) 天津師院學報一九八〇年一期

論文題目はすべて詩文の一節から取っているため、以下では内容を明示する副題の方を表記することにする。

\* \*

冒頭の論文(1)副題——《聊齋志異》作者蒲松齡生活的時代和社會環境——は、まず初めに「(明末清初の) 社會環境が、蒲松齡のような作家に思想から藝術まですべてにわたって直接的な影響をもたらし、單に彼の世界觀や藝術觀を決定づけたのみならず、創作に用いた形式、選擇した題材、適用した技法をも強く決定づけた」(三頁)と、社會と個人(作品)の關係を規定し、そのうえで『志異』と當時のさまざまな社會的文化的な背景との關連を探ろうと試みる。

社會と個人(作品)の關係は、確かに本書の説く通りであり異論はない。だが問題はその自明とも見える關係を、如何に具體的に分析し提示するかに在る。本書の敘述は、當時の社會狀況を説くのに熱心な餘り、影響を受ける側の『志

異』について具體的な指摘や論及が少ない點が氣にかかる。例えば(一)(二)節、明末起義から説き起こし、清朝成立、南明滅亡、三藩の亂と、當時の政治情勢に纏々言及しながら、(三)節を「三藩平定の關には蒲松齡の創作上の題材の一つとなり《聊齋志異》の中に記された」(八頁)と締めくく

る。著者は作品名をあげていないが、「三藩平定……」に該当するのは「張氏婦」(三會本卷11、以下同じ)である。内容は、三藩の亂平定に向う清軍が、山東で無統制な狼藉を働き、ある賢婦がそれに一矢を報いるというもの。三藩の亂云々というのは、ただ物語の事件發生の時刻を示すだけであり、内容に殆んどかわわっていないにも拘らず、恰もそうであるかのような表現をするのは頂けない。

また(六)節では、康熙年間の文字の獄を列舉し、その清朝の彈壓政策が『志異』に超現實的な題材とロマン主義的手法をとらせた、と説明している(一三頁)。だがこども、評者の読み誤りでなければ飛躍を含む。何故なら、超現實的な題材——冥界や轉生など——は六朝志怪の常套であつた

し、人間と妖狐の戀愛に見られるロマン主義的手法も、唐代傳奇にしばしば出現した。清初の特異な政治状況がそうした題材や手法を『志異』にもたらしたとは言ひ切れないからである。

もし文字の獄の與えた影響を『志異』の中に推し測ろうとするならば、作品の語句表現のレベルの検討から出發すべきではなかったか。

例えば『志異』の「微詞」について、本書も他の個所（二八五頁以下）でいくらか觸れているが、先の「張氏婦」で言えば、清軍を指して原文は——抄本のみで青本は未收——「南征之士」とか「蒙古兵」とか頗る微妙な表現を用いているし、常林炎の指摘の如く自筆稿本は「玄」字を「玄」で代替して帝諱（康熙帝玄樞）を回避している。こうしたテキストの記述に密着した検討を重ねた末に、文字の獄が松齡に與えた無言の壓力を議論できるのではあるまいか。

『志異』の中に清初の諸相がさまざまな形で發現しているのは、作品が時代の産物である以上當然であろうが、む

しろ當然なるがゆえにそのことの論證には、可能な限り個別的具體的な分析と考察が求められよう。残念ながら本書はこの點がなおざりにされているため、せつかくの時代背景の敘述も『志異』との接點を缺いたまま終っているように見受けられる。

論文(2)副題——蒲松齡的生平與著作——は、前半で松齡の生涯を傳記的にまとめ、後半で『志異』のテキストを紹介し執筆時期を推定する。著者も末尾で述べているように特に目新しい材料や觀點はないが、全體に要領を得た紹介になっている。ただ傳記の部分はほぼ路氏『年譜』に沿っているようであるが、『年譜』にいくつか誤りがあること（例えば館師の時期）高明閣の論證する通りである。

論文(3)副題——略談蒲松齡思想的重要一面——は、松齡の思想を唯心主義と斷定し、その思想的限界（男尊女卑、迷信、儒教擁護）を指摘する。

論文(4)副題——蒲松齡藝術觀掇瑣——は、詩文、賦、俚曲、小説、實用雜著と多岐にわたる創作活動を、彼の統一的な藝術觀の發露と見做し、唯物論に照らし合わせながら、

それを形成した環境因子を検討し「苦難に満ちた現實社會」「壯麗な祖國の山河」「歴代のすぐれた作家と作品」(八二頁)の三つを指摘する。

この論文(3)(4)や後述の(6)に共通するのは、マルクス、エンゲルス、ベリンスキーなどの發言を引用し、唯物論や階級論の立場から『志異』を論斷する態度である。そこには「蒲松齡には自らの審美觀と美的創造があり」「ここから我々は必ず有益な啓示を獲得できる」(八三頁)や「我々の創作にきつと大きな啓示をもたらし、我々が自覺的に思想と藝術の缺陷を克服するのを助けよう」(一二三頁)の言葉が指し示すように、著者が文學研究に於いても古典から學ぼうとする基本的な姿勢が窺える。そしてそれは現代中國の一つの研究の在り方として尊重されねばなるまい。

論文(5)副題——《聊齋志異》的創作和生活的關係——は、一見荒唐無稽に見える『志異』の作品にも、作者の多くの現實生活が多様な形で投影されていると説き、『日用俗字』『農桑經』『傷寒藥性賦』『草木傳』といった、これまで顧みられること少なかった松齡の著作に着目し、『志異』

との關連を追求している。山東各地の地方志の引用など、幅の廣い資料の活用も相俟って、著者の安定した論理や鋭い考察を發揮した好論文である。

論文(6)副題——從《聊齋志異》對生活的描寫和評述談它的形象與思想的關係——は、作者の持つ「主觀思想」と、作品自體の持つ「客觀思想」の關係を巡って、極めて原理的な考察を展開する。そして「促織」(卷4)を例にとり、この作品のすぐれた思想性が作者の「庸俗な報恩思想」や「勸百諷一」的教訓を超えていると分析。「異史氏」の評語による作者の直接の作品解説を手掛りに、作者の創作意圖と作品世界の自立という興味深い問題を扱っている。

論文(7)副題——中國文言短篇小說的發展和《聊齋志異》的繼承創新——は、まず初めに先秦、漢魏六朝、隋唐、宋元明の四つの時代區分に「孕育、萌芽、發展、衰落」という文言小説の歴史をあてはめて簡述し、『志異』を衰退期に出現した集大成として位置づける。(ただし本書は『志異』の出現を恰も突然變異であるかのように述べるだけで、それを準備したと思われる文學的系譜については素通りしている)

そして、『志異』が如何に古代神話から明代筆記まで幅広く素材を求め、如何に六朝志怪と唐代傳奇の長所を攝取して獨自の世界を築きあげたかを強調する。そうした論述の中には、『志異』の名を、「任氏傳」末尾の「衆君子聞任氏之事、共深嘆駭、因請既濟傳之、以志異云」から得たに違いないという新しい指摘（一四三頁）も含まれていて示唆に富む。

しかし難を言えば、ここでも目につくのは問題意識の淺さと精致な分析の缺如である。例えば、物語の題材や主題について『志異』と唐代傳奇の類縁關係に言及しているが（二三〇頁）、それは一讀すれば誰にでも容易に看て取れる程度のものである。

著者があげている「續黃梁」（卷4）は、「枕中記」の燒き直しであること言を待たない。けれども「枕中記」の失意の盧生に對し、「續黃梁」は科擧及第で得意滿面の俗物たる曾生を主人公に立て、また眠りに入る前に早くも占者から宰相になる預言を聞き、夢の中では榮華を極めたのち地獄に墮ち、やがて轉生して女に生まれ變わる等々、原作

の人物設定や構成を裏返したうえ、より新しい趣向を盛り込もうと試み（それが成功しているか否かは別問題としても）、宋代傳奇「慈雲記」とも一味違ったパロディに仕立あげられている。

本書がこうした物語の細部にわたる質的な差異を見過ごしているのは残念である。というのも、原話との嚴格な比較検討を経たうえでこそ始めて、著者の言う『志異』の「繼承創新」の全貌が明らかになるのであるから。

また「六朝小説のロマン主義的要素と唐代小説の現實主義的創作方法の融合」（一三六頁）の見本として、著者は「余德」（卷4）を指名している。今この作品について少し検討してみよう。荒筋は次の通り。

尹圖南の別莊の新しい借り手として、余德という貴公子のように上品で金持ちの青年が來た。余はある日大家の尹を招き、不思議な術を使ってこの世のものは思えぬほど優雅で楽しい宴を開いた。尹が人々に吹聴したため、余は煩くなつてどこかへ立ち去ってしまった。別莊に殘されていたので尹は水を張り一匹の金魚を飼った。その鰓は、

壊れても水が流れず、水が凍っても金魚が泳いでいるという不思議なものだった。やがてそのことも人々の聞き知る所となった。すると甕の水は急に地面に吸い込まれ金魚も姿を消してしまった……。

著者は大幅に原文を引用したうえで「構想の精密さ、想像の豊かさ、描寫の繊細さ、形象の感動的なことは人を感嘆させずにおかない。ロマン主義の藝術の魅力が表現され、作者獨特の境地や風格がにじみ出ている」(一三九頁)と評する。だがこれだけの説明では、どの部分の描寫が「細膩」であり、どの點について構想や想像が「精巧」で「豊富」であると主張するのか、甚だ不鮮明である。

著者は、この作品の解釋に際して、余徳が金魚の化身(余と魚は同音)であろうと言う李長之の指摘を、忘れているかに見える。即ちその指摘に従えば、物語の主題は、雅俗の對立の中で、異類が姿を變えて二度繰り返し語りかけていることになる。そしてこのことを見落せば、物語の前半と後半は、全く有機的な關連を失った話に分裂してしまふに違いない。

論文(8)副題——略談《聊齋志異》的思想内容——は、腐敗官僚への批判、その裏返し of 清官稱揚の公案物、科擧批判、女性觀、といった『志異』のテーマに見られる松齡の思想の功罪を述べ立て、そこから歸納して四つの思想的限界、(一)農民起義への無理解、(二)因果應報觀念、(三)封建倫理道德觀、(四)迷信への煽動、を指摘し、最後に松齡の民族意識の問題に觸れる。

松齡に民族意識があつたか否かの問題は、かなり以前から活潑な論議の對象となり、最近では胥駝の論文がこれについて周到な論議を展開している。本書は松齡に民族意識があつたとし、ただそれは當時の嚴しい言論統制から隱微な表現に留まり、且つ他の多くの現状肯定的な文章から見て、過剰な評價は危険であると言う。評者もこの意見に賛成である。しかし附け加えるなら、この論旨の骨格が楊柳『聊齋志異研究』(六一—八〇頁)や徐士年<sup>(5)</sup>の論文に負っていることを本書は注記すべきであろう。

論文(9)副題——散議《聊齋志異》中矛盾衝突的藝術構成——は、『志異』のストーリーが幻想と現實、美と醜など



さまざまな次元での「矛盾」の對立から生まれ、偶然や必然の觸媒によって解決されてゆく、と主張。そして構成の技巧として、(一)斬新な對立を絶えずストーリーに導入し展開する、(二)對立の核心を重點的に描き、そこから四方八方へ事件を派生させる、(三)大きな對立の枠内に小さな多くの事件を連結する、の三つをあげる。そしてこうした分析の武器として、内的矛盾を自己の發展の過程の中で統合し止揚する辯證法的な思考を一貫して用いている。

また著者は「二商」(卷7)を例示し、「食糠、遇盜、遭殘、呼救、去盜、怨報、……得金、助侄、平怨」と曲折と波瀾に富むストーリーの面白さを強調しているが(二〇四頁)、それも場合によりけりであり、餘りに目まぐるしく變化するストーリーであれば、逆に讀者に主題を見失わせることもあり得る。發端、展開、解決という物語の過程は、その曲折のみを取り出して論ずるというのではなく、例えばそれが現實世界の情理とどのように整合しているか、記述配分とどのように適合しているか等の問題と関連づけての考察が必要のように思われる。

論文(10)副題——《聊齋志異》刻劃人物性格的幾點特色——は、『志異』が表面的な描寫(年齡、容貌など)を最少限に抑える一方、性格や行爲といった側面に比重をかけ、そのことによって登場人物に内面的な陰翳をつけようとしていると指摘する。更に人物間の性格や思想の對比、變化、誇張などをも取りあげ分析し、多角的に『志異』の人物形象の祕密を追求する。

論文(11)副題——《聊齋志異》的結構特徵——は、『志異』の作品構成の大きな特色が「敍議結合、先敍後議」にあるとし、具體例としていくつかの作品をあげ史傳作品の影響をそこに見出す。ただ全體的に論述の切り込みが浅く『志異』の布置構成の巧妙さを再確認するのに終わっているのは惜しい。

最後の論文(12)副題——《聊齋志異》的語言美——は、『志異』の言語表現の特徴を、(一)文言特有の簡潔と含蓄、(二)鮮明な形象化、(三)言語の個性的用法、(四)卓越した語彙選擇、(五)口語の吸收、(六)散文詩の如き言語美、(七)溢れる餘韻、(八)すぐれた會話、(九)音樂的な韻律美、と列記する。

實にさまざまな角度から本書は『志異』の言語表現を剖析し吟味している。だが敢えて二、三の注文をつけるとするならば、例えば『志異』の文體は、前野直彬<sup>(6)</sup>氏の言うように基本的には古文で記され、場面に應じて白話や駢文も挿入され、それらが渾然一體となった魅力を發揮している。著者は(一)で文言小説に特有の簡潔な力強さを指摘し、(四)で口語の大量吸収とその鍛鍊による新しい文言體の創出を説き、(九)で四字句六字句を多く含むリズムミカルな文體を稱揚しているが、それらの論述は『志異』の多彩で華麗な文體に振り回され、いささか統一を缺いている嫌いがないでもない。古文の簡勁と駢文の流麗とは相容れない言語特性であるし、白話の冗饒圓滑さもまたそれらと別の効果を持つ。そうした多面的な文體を包括した『志異』の文章を説明するには、もう少し充分な分析と検討が必要であろう。

あるいは(三)言語の個性的用法とは、著者によれば、言語表現を通じて松齡の風格や個性が滲出すること、作中人物の特徴や個性が明確になること、の二つの面を意味すると言う。しかし、まず前者の文體を介して松齡の個性が表現

されているという主張は、「文は人なり」の語が示すように言語學的な常識なのではあるまいか。そして松齡の文體がどのように個性的であるかは、何より他の作家との比較に於いてその獨自性を明らかにするべきであろう。何故なら、單に『志異』の文章のみを取り上げてそれが個性的であるか否かの判断は極めて困難であるから。更に作中人物の個性云々についても、本書は「閻王」(卷5)の中の對話を引き、登場人物(嫂)の粗暴で狡智な性格が如實に描出されていると説く。だが、その嫂の科白は僅かな中にも『後漢書』(孟姑姑)『戰國策』(東食西宿)元稹詩「我是玉皇香案吏」等の典故や比喻をちりばめており、「凶横、狡詐、粗野」な婢婦にふさわしい言葉使いかどうか微妙である。

更に(八)は『志異』のすぐれた會話描寫を指摘し、その例に「鵲異」(卷6)を引く。引用箇所は、鳩氣違いの公子がとっておきの鳩を高官に差し出した所、相手は鑑賞用と思わずに食べてしまった、そのことが露見する場面の會話である。作品そのものは、「癖」に取り憑かれた青年が無理解な周囲の俗物のため夢を破られる物語なのであるが、こ

の場面のやりとりだけ取り出せば、これは愚鈍で無神経な人間の勘違いを嘲笑する笑話の類いに近い。著者の「生動、簡練、質朴に富み、二人の性格と感情が交差し衝突し、作者の美學態度も表われている」(二四九頁)という仰々しいコメントに評者は賛成できかねる。

なおこの一段の會話は、評者の知る限り、明末の馮夢龍編『古今譚槩』(一名古今笑)の卷8不韻部「金魚」と同工異曲である。蛇足ながら参考までに兩者を列記しておこう。

……他日、見某公、頗有德色、而某殊無一申謝語。心不能忍、問前禽佳否。答云、亦肥美。張驚曰、烹之乎。曰、然。張大驚曰、此非常鵠、乃俗所言粗獷者也。某回思曰、味亦殊無異處。(鵠異)

……他日、守公謂張曰、前惠魚、但美觀耳、味殊淡。蓋守北人、已將魚付鑊下也。張但唯唯而已。(金魚)

最後に、本書に附された『志異』選注百篇について言え

# 書評

ば、從來の選注本に比べ百篇という分量もさることながら、語注に『志異』の他の作品の用例の併記がより多くなっているのが光る。

以上本書の紹介と論評を試みたが、評者自身の無知や誤讀による臆斷が含まれていなければ幸いである。とまれ本書が近年にない『志異』研究の收穫であることに少しも變わりはない。

## 〔注〕

- (1) 「就古典文學的研究方法談《促織》的評論問題」(『文學評論叢刊』五輯、一九八〇年、中國社會科學出版社)
- (2) 「蒲松齡的一生」(『蒲松齡研究集刊』二輯、一九八一年、齊魯書社)
- (3) 「蒲松齡和兒童文學」(『中國古典小說評論集』一九五七年、北京出版社)
- (4) 「《聊齋志異》的民族思想」(注(2)に同じ)
- (5) 「試談《聊齋志異》的思想」(注(3)に同じ)
- (6) 「《聊齋志異》の言語」(『中國の八大小説』一九六五年、平凡社)

(鹿兒島縣立短期大學 岡本不二明)